

枕初見

〔古事記傳二十四〕枕は麻久良伎氏と訓べし。○中麻久良久とは麻久良加牟久^{マクラギテ}、枕にするを云て、鬱^{カツラ}にするを加豆良久と云る。○註と同じ言格なり、又麻伎氏とも訓べし。其も同意なり。^(中略)

云名も、もと麻久より出で、纏座の伎久を切めて、麻久良と云なり。凡て何にまれ物を居る具を座^{クラ}と云、枕は物を纏て頭を居る座^{クラ}とせるよしの名なり。さて枕にすることをやがて纏^{クラ}とも云なれども、手をまく、袖をまくなど云是なり。又其に其用言を添云の歌に麻久良^{マクラ}久ともあり、其は言重なり。

〔古事記上〕故爾伊邪那岐命詔之、愛我那邇妹命乎^{音下敷此}、謂易子之一木乎、乃匍匐御枕方^{アマシキ}御足方而哭、

〔宗五大草紙下〕殿中さまぐの事

一公方様御寢所には御座をしかれ候。○中御枕つねのごとしくろくぬり候也。かまち同前、一方にはばくといふ獸を書申候。

〔武雜記〕一御枕の繪之事、禁中にも御用候事也。かたくは模なり、かたくは菊又は鶴などの類をかき申候、公方様にも同前。

〔筆のすさび上〕大村鶴汀老人の談に、枕を製するに、高サに定りたる宜き寸法あり、壽命三寸、樂四寸と覺ゆべしといへり。此寸法に遵ひ枕を製し試るに、至極せる事なり。

〔雲錦隨筆四〕枕の高さは壽命三寸、樂四寸と覺えてよし。

〔菟裘小錄〕枕は、夏は風とほるやうにすべし、わが肩のひろさをもとにして、少しづ、高下すべし。〔嬉遊笑覽服飾〕古へに草枕、薦枕、篠枕、杉枕、菅枕、柘の小枕などいふ、草木の葉を束ねて枕としたるにや、然らばこゝには括り枕本義なるべし。

以原質爲名

枕種類

〔冠辭考三〕こもまくら。高はし。高瀬のよどたかみむすびの神
武烈紀に、影舉暮摩矩羅、柁箇幡志須擬、神樂歌に、こも枕高瀬の淀や云々、三代實錄に、清和薦枕、高御產栖日神社ともいへり。古へ蔣を以て枕とせしことは、萬葉卷七に、薦枕相卷之兒毛^{アマシキコ}在者社、卷